異郷へいざなう魅惑と憂愁のバラード

沼野 恭子

『ちいさなタグボートのバラード』は、ノーベル文学賞を受賞したロシア出身の亡命詩人ヨシフ・ブロツキーの詩と、国際アンデルセン賞を受賞した現代ロシアのアーティスト、イーゴリ・オレイニコフの絵が、これ以上望めないほど美しく調和した夢のような絵本です。

ブロツキーはソ連で「徒食者」といういわれなき罪状で逮捕される少し前の一九六二年、児童向け雑誌『たき火』に詩をほんの数編発表していました。「ちいさなタグボートのバラード」はそのうちの一編です。そのため体裁としては子ども向けの詩と考えられます。現にこの作品は、「これがぼく」「ぼくはタグボート」など、幼い子どもにもわかる易しい言いまわしで始まります。とはいえ、わかりやすい表現であっても、力強く凛とした「詩的言語」であることは疑いようもありません。内容的にも、擬人化されたタグボートのなにげない日常描写が、読み進むにつれ、いつのまにか抒情的で切ないドラマへと昇華していき、ブロツキー自身の姿と「永遠」を連想させる見事なまでに感動的なラストシーンへとつながっていくところに、子どもも大人も物語の力と詩的ダイナミズムを感じるにちがいありません。ブロツキーがこの詩を書いたのは「雪どけ」と呼ばれる時代。それ以前のスターリン時代に比べれば芸術活動にも多少の自由が認められたのですが、それでも全体主義的な閉塞感が漂っていましたし、ふつうの人が自由に外国に行くことも叶いませんでした。そんな中で児童文学のジャンルは、当局と対峙しなければならない優れた詩人や作家が翼を広げることのできるオアシスのような領域だったのです。

それから約半世紀を経て、オレイニコフがこの魅惑と憂愁のバラードを視覚化したのが絵本『ちいさなタグボートのバラード』です。ブロツキーが英語、ドイツ語、フランス語の挨拶を取りこんでヨーロッパ的な情緒を醸しだしたのに比べ、オレイニコフのイラストはアフリカか南米を思わせる個性的な船舶、スフィンクス、富士山に似た形の山なども描いています。ヨーロッパの方を向いていたブロツキーの視線が、オレイニコフによって世界のさまざまな地域にまで広げられた、言葉を換えればオレイニコフの解釈と絵の力によってブロツキーの詩的世界がいっそう拡張したと言えるのではないでしょうか。

『ちいさなタグボートのバラード』は読者のみなさんを霧のペテルブルグへ、さらにはまだ見ぬはるかな異郷へといざなってくれるはずです。

ぬまの・きょうこ
総合国際学研究院教授／総合文化研究所所長
ロシア文学

ちいさなタグボートのバラード
ヨシフ・ブロツキー【詩】
イーゴリ・オレイニコフ【絵】
沼野 恭子【訳】
2019年11月刊